

森林の国の環境を通して行う教育

東北文教大学 講師 村上 智子

「日本の木は?」「あなたが住む県の木は?」「げたは何の木? くしは? たんすは?」「トトロの木は?」「日本で一番多いのは何の木?」「あなたの生活の場に木のモノはありますか?」

「木育」に関するワークショップでの、講師の松井勲尚氏（岐阜県立森林文化アカデミー）の質問である。私はいずれも答えることができず…。そして、生活空間に木のモノがほとんどないことに気づいた。

「日本は森林の国（国土に対する森林の面積は68.5%で、世界3位（2010））」、「木（特に精油成分フィトンチッド、木の香りのもと）は人によい影響を与える」と知っていても、意識しないと生活空間に木のモノを取り入れることは難しい。木育を実践している保育園の報告の中で、「木育活動を始めた頃は、子どもたちが木の香りを臭いと言った」そうである。

「木育」とは、北海道庁が主導した「木育プロジェクト」（2004年発足）で提案された新しい教育である。国においては、2006年の「森林・林業基本計画」に「木材利用に関する教育活動」と明記された。2011年には「森林体験活動の機会の提供、指導者の育成、国民生活に必要な物資としての木の良さやその利用の意義を学ぶ活動」と変更されて、「木育」の定義と活動の範囲が広がっている。

幼児が木とかかわる活動がもう一つある。「森のようちえん」と呼ばれる、1950年代にデンマークの女性が森の中で子どもを遊ばせたことが始まりとされる、森林を中心とした自然の中で保育（幼児教育）をする活動である。その後、ドイツなどヨーロッパ、そして日本にも広がり、山形県村山地域においては現在、2009年度から始まった村山総合支庁森林整備課主催の「村山版森のようちえん」事業が展開されており、モデルの実施と研修会を行うことで幼児期の森林環境教育の普及を図っている。

「木育」と「森のようちえん」の違いは、前述の松井氏によると、「木育」が木（木材、wood）からのアプローチであるのに対し、「森のようちえん」は樹（立ち木、tree）であると言う。つまり、「木育」は、木材の利用から森林体験活動、環境教育へと広がっていく活動に対して、「森のようちえん」は森林という環境を利用した保育（幼児教育）活動であり、自然の中で子どもが感覚を研ぎ澄ませて遊ぶことによって、結果として自然とのかかわりを学んでいく活動である。したがって、私が大切にしたいのはその過程である。

幼児は視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚といった五感をフルに使い、森林がつくりだす環境のすべてにかかわる。そこには、森林特有のにおい、風でこすれあう枝葉の音、木漏れ日、葉の色や形の違い、季節による変化…どれも、じっくりとかかわらないと気づかないものがたくさんあり、子どもは自然の放つかすかな刺激を感じて楽しむ。

そして、自然は唯一のものであり、偶然のものであり、常に変化しているものである。幼児たちはその多様で変化に富む環境での直接的な体験から語彙や感性を豊かにする。さらに、自然は必ずしも幼児にとって都合のよいものとは限らない。思うようにならないことに対して、身体を駆使したり、友だちと協力して解決しようとする。

「木育」と「森のようちえん」。森林の国の人間育成の方法として、地域や園の実情に合わせて積極的に保育に取り入れられていくことを望む。

村上 智子（むらかみ・ともこ）

ノートルダム清心女子大学大学院修士課程修了。専門は保育学。主な研究テーマは、乳幼児期の基本的生活習慣の獲得とその援助について。最近、森のようちえん（里山保育）に関する研究を仲間と共同で進めている。木造注文住宅メーカーに勤務した経験を持つ。